

アーカイブ Data Report NO. 33

(2020年8月19日)

〒500-8813 岐阜県岐阜市明德町10番地 杉山ビル5F
E-mail: shikaku@npo-nak.com URL: https://npo-nak.com

デジタルアーカイブにおける時間軸と空間軸

飛騨高山匠の技のデジタルアーカイブ



久世 均 (岐阜女子大学)

1. 飛騨高山の匠の技の時間軸と空間軸

飛騨匠の徴発(出役)規定。はっきり出てくるのは、養老令という法律の中で出てきます。この養老令というのは718年につくられて、757年に施行されました。757年に施行されたということになると、奈良時代になります。この飛騨の匠というのは本当にいたのかと。飛騨の匠は本当に奈良のほうに働きに行ったのかと。証拠があるのかということですが、証拠はあります。木簡、木札に書いてあるのです。紙のかわりに書いてある木札、それを木簡というのですが、その木簡が平城京の発掘調査によって、大極殿のすぐそばの楼閣建物の近くに木簡が出ています。



図1 木簡

その中で、第一次大極殿院の東楼ですね。「造東高殿飛騨工□」と書いてありますが、この東高殿を飛騨の匠が担当したと。何人かというのは、はっきりとはわかりませんが、この東高殿というのが大極殿の入り口のところの楼閣建物となる。ここのように、重要な大極殿のところにも飛騨の匠が携わっていると分かります。そういう木簡が証拠としてわかるわけです。また、藤原京の近くには飛騨町という地名が今でも残っています。(デジタルアーカイブ in 高山 報告書 2018.2.4 より)

デジタルアーカイブでは、このように歴史を紐解き、それらの資料を写真と共に記録保管する必要があります。すなわち、時間軸と空間軸で記録を取ることが重要なのです。



図2 藤原京(飛騨町)



図3 平城京(大極殿)

2. 飛騨高山匠の技とところ

飛騨の匠の建物として、何が飛騨の匠の技術なのかと。今の国分寺の建物、室町時代、そしてまたこの国宝・安国寺の建物。飛騨の匠の技術がどういうところに生かされておるのかということなのですが、文化庁の建築専門の人に、飛騨の匠の技術で、デザイン的にはどうなのですかと質問をして聞いてみました。そうしたら、見るべきものはないと。日本全国同じデザインで指示されているので、デザイン的には全く同じですと。そうしたら、飛騨の匠の技術なんて、ないのですかと言いましたら、いや、あると言うのですね。何が飛騨の匠の技術かといいますと、材です。材は、安国寺のこの経蔵、そして国分寺の建物の材、信じられないぐらい良い材を使っているというのですね。檜で、直径が本当に2メートルも3メートルもあるような、そういう巨木でないととれないような柱目の板材です。そういうものをふんだんに使っているということですね。そういうところが、飛騨の匠の目利き、木材をこうやって選ぶ、そして木材の良い材をこうやって使い続けるという目利きが見られるということで、それで長もちするのです。飛騨の匠がつくりました材というのは、もの凄く長持ちをするわけです。それで、この安国寺も国宝として、ずうっと残り続けているということになるわけです。

こういう伝統の中で、江戸時代、この高山の町並み、こちらのほうも頑張っって残り続けています。高山の町並みですね。上から見ると、屋根がだんだん統一されておりますけど、全部檜ですね。土台も檜でつくられております。デザイン的に、本当に非常にいいと思います。(デジタルアーカイブ in 高山 報告書 2018.2.4 より)

このように、現在と過去を比較することができるようなデジタルアーカイブも必要になります。



図3 安国寺（経蔵）



図4 安国寺（経蔵の内部）



図5 高山の町並み



図6 高山の町並み